

温泉コラム

● 第 8 回 ●

「道東編・其の弐」

札幌呼吸器科病院 薬剤部

河野文昭

(温泉ソムリエ・温泉保養士・温泉入浴指導員)

1. 極東の温泉達

前回紹介した川湯温泉や阿寒湖温泉ですが、いずれもロケーションの良い湖畔や景勝地に温泉街があるという事で、比較的有名な部類に入る温泉観光地かと思われれます。北海道の中でも極東に位置するエリアでは、人々の生活圏が徐々に秘境化して行き、このような温泉街はあまり見られなくなっています。

北見・網走方面にしても、知床の観光拠点であるウトロ温泉を除けば、留辺蘂の温根湯温泉辺りに数軒の温泉旅館やホテルが点在するものの、浴衣を着た観光客がそぞろ歩くような大規模な温泉街は存在せず、各町にある老舗の小規模旅館や温泉銭湯が、半ば地域住民の生活に溶け込むような形で、細々と営業を続けているわけです。

今回も地熱や水源などを考察しながらいくつか

の温泉を紹介しますが、なかなか行けない極東の地という事もある、あまりリサーチが及んでない点も多々あります。その点については何卒御容赦いただければと思います。

2. 釧路から根室間にある唯一の温泉・霧多布温泉

釧路市内は塩の湯が出る事で前回は紹介しましたが、それ以東の沿岸部は地熱が乏しく、積極的な掘削も行われてはいないようです。最果ての根室市内にも温泉はなく、釧路から根室に至る国道沿いとしては、霧多布温泉が最も東にある温泉となります。

霧多布温泉ゆうゆは浜中町の霧多布岬付近にある温泉施設ですが、泉温は僅か11℃しかなく、成分総計は2695mg/kgと微かに含んだ塩分でギリギリ基準をクリアしている温泉です。泉質はナトリウム/塩化物泉で、海の直ぐ傍という事もあり、腐植質はなく色も透明です。湧出量もかなり少ないらしく、加水等の調整も行われている。この為、泉質としてのインパクトは薄い霧多布温泉ですが、浜中町は観光地としてはかなり穴場的な要素が強く、琵琶瀬展望台からの湿原風景、湿原のド真ん中を突っ切る道道808号線、霧多布岬など、豊富な観光資源を供する保養施設としては、十分な役割を果たしているのではないかと思います。

故モンキーパンチ氏の出生地という事もある、ここでしか買えないルパン三世グッズがあったり、そういった面での付加価値も含めて評価しておきたい温泉ですね。



参考資料①：写真では上手く伝わらないが、琵琶瀬展望台から見る霧多布湿原の光景は圧巻。

当然の事ながら浜中町は海産物も非常に豊富で、美食面でも非常に魅力的な街であります。私自身も本州から観光に来た知人を取って釧路以東の厚岸～浜中町界隈へ連れてきた事がありますが、定番の観光ルートでは味わえない風景(特に琵琶瀬展望台は好評でした)と美食に、大変満足してもらえました。道内在住の方でも、まだ未踏の方は一度浜中町を観光してみたいかがでしょうか？

3. 溪流沿いの露天風呂が素晴らしい養老牛温泉

摩周湖から東側には、斜里岳に由来するとされる標津川水系に、摩周より続く地熱が重なり合っていていくつかの温泉が湧出しています。

そのうちの一つに養老牛温泉という風光明媚な温泉があるのですが、これは札幌圏でも知っている人は知っているのではないかと思います。養老牛温泉の湯宿だいいちは、標津川の美しい透明な水を由来とするナトリウム・カルシウム/塩化物・硫酸塩泉を有しており、溪流沿いに作り上げた露天風呂は大変素晴らしいロケーションとなっています。浴場も大変素晴らしいのですが、建物全体が手の込んだ格調高い木造建築となっており、明らかに高級志向のお宿という印象です。駐車場の札幌ナンバーの数の多さを見るに、どうやらリピーターも多い人気宿となっている模様。

源泉温度は75.3℃もあり、高い地熱がある事が判ります。この施設では複数の源泉井を集合させた混合泉を利用しており、成分総計はやや薄めの1586mg/kgとなっていました。豊富な湯量を使っ

てサウナ&水風呂完備の内湯の他に、露天エリアにぬる湯、寝湯、溪流を見ながら入れる混浴風呂など、風呂の種類も豊富で、浴場としてのエンターテイメント性が高い事も特徴です。

なにぶん都市圏から遠く離れた場所にある温泉ですが、地方に行くときのように小規模ながら富裕層を満足させられる旅館はなかなか少ないのが実情です。コロナ禍のダメージをどの程度受けているのかは判りませんが、こういった温泉は大変貴重ですので、懐に余裕のある皆さんは是非、密を避けた一人旅としてでも宿泊して頂ければ幸いです。

4. 標津川沿いに続く透明な温泉・中標津温泉とオホーツク温泉(標津川温泉)

養老牛温泉からさらに東へ行くと、蛇行した標津川は中標津町を通過し、町内にはいくつかの温泉が湧出しています。空港がある事からマルエー温泉など温泉を利用したビジネスホテルもいくつか存在していますが、今回は公共浴場として中標津保養所温泉を紹介します。

中標津保養所温泉は源泉名としては「東中温泉」との表記がされており、成分総計2199mg/kg、泉温49.8℃のナトリウム/塩化物泉で、pH8.72となかなかのアルカリ性を呈しています。それを反映するように成分分析表にも水酸化物イオン(OH⁻)が0.1mg/kgの表示がありました。湯に浸かると肌にツルツルとした感触があり、アルカリ性のお湯が皮脂をケン化している事が判ります。養老牛温泉と同じ標津川水系を水源とする温泉という事で、



参考資料②：中標津温泉(東中温泉)の主浴槽。標津川が水源となっており、透明度の高いお湯が湧出している。

やはり腐植質はなく、見た目も透明なお湯です。掛け流しが可能な温度なので、香りのよいお湯を楽しむ事が出来ます。

浴場設備としては内湯、露天の標準的な設備ですが、ここは別途岩盤浴も併設されており、地元的女性も数多く利用しているようです。岩盤浴の合間に利用するであろう温泉も、低張泉という事で身体への負担も少なく、湯あたりしにくい事も特徴です。

中標津温泉からさらに東へ進むと、標津川はいよいよオホーツク海へと流れ込みます。標津川水系の終着点でもある標津町は、鮭の産地としても有名で、大量の鮭が産卵のために河川を遡上する事でも知られています。蛇行した標津川はこうした鮭達の為に保存管理されている河川であり、これらの研究は標津サーモン科学館で学習する事が出来ます。

この標津町にも温泉は湧出しており、恐らく屈斜路湖や摩周湖から連なる地熱が、帯状に東へ向かって伸びているものと思われます。標津町内にあるオホーツク温泉(標津川温泉)は、旅館「楠」に併設した公衆浴場「くすのき」で入浴する事が可能で、これまた良い塩梅のお湯が湧出しています。

ここでは成分総計775mg/kgのアルカリ性単純泉が提供されており、この源泉は44.1℃と、掛け流しに最適な温度で湧出しています。寒い土地であるため、冬場は多少の加温があるかもしれませんが、pH9.07の湯は中標津温泉よりも顕著なツルツル感があり、浸かった瞬間にその鮮度の良さを

感じ取る事ができました。見た目も濁りのない無色透明で、土臭さもない事から、泥炭や腐植質はほぼ無いと考えても良いと思います。隣の別海町では暗褐色のモール泉が出る事を考えると、やはり標津川の存在は泉質を決める上で大きな意味を持つようです。

また、標津町は海にも面した町ですが、殆ど塩分が検出されてないのも興味深い点で、釧路との地形の差を感じさせる温泉となっています。標津サーモン科学館の敷地内にも湧水がある事を考えると、標津町の地下には豊富な淡水資源が眠っており、こうした環境が透明度の高い温泉を産み出している事が判ります。

個人的にも標津町のオホーツク温泉(標津川温泉)の評価は高く、ここまでお湯の純度・鮮度の高い温泉は北海道では珍しいと思います。鮭を使った美味しい郷土料理と併せて、是非立ち寄ってみたい温泉の一つです。

5. 清里・斜里エリアの温泉

川湯温泉から国道391号線を北上すると、この区間では比較的難所となる野上峠を経て小清水町に至り、そこから東西で斜里町と網走市への分岐に到達します。このエリアにもいくつかの温泉があります。

まず野上峠を越えた先にある清里町緑町の「緑の湯」は、ほぼ地元民しか知らないであろうマイナーな温泉となっています。詳細な成分分析表が無かったので一部情報しか得られておりませんが、



参考資料③：公衆浴場「くすのき」の浴場。施設の裏にボイラーがあるため、冬季は若干の加温があると思われる。

泉質はナトリウム/塩化物・硫酸塩泉となっています。舐めた感じ塩気は少なかったので、恐らく成分総計はそれほど多くなく低張泉だと思われます。源泉温度は44.3℃あり適温。色は少し茶色がかっており、腐植質の存在を伺わせます。油のような匂いはなく、微かに土の香りがしました。偶然なのでしょうが、札幌市の豊平区にあった同じ名前の温泉「緑の湯」と色も浴感も非常に似ていました。雰囲気的にも小さな集落の憩いの場といった雰囲気、そういった点でも札幌市の「緑の湯」と似ているような気がします。

野上峠を越えてオホーツク方面に至ると、右手に美しい稜線を描く斜里岳が目に入ってくるようになります。斜里岳を望む清里町内には道の駅と併設したパスタランド温泉(ナトリウム/硫酸塩・塩化物泉 泉温53.7℃ 低張泉)、清里温泉緑清荘(ナトリウム/塩化物泉 泉温52.9℃ 低張泉)が連なり、隣の小清水町にも小清水温泉(アルカリ性単純泉 泉温54.6℃ 低張泉)と、無数の高温泉が湧出しています。この辺りは恐らく斜里岳の地熱に由来する温泉かと思われませんが、溶岩流の影響があったのかどうかは不明ですが、いずれの温泉も色は茶色や緑がかっており、腐植質の存在を感じさせるお湯でした。

私も道内各地で様々な温泉を巡ってきましたが、泉温はともかくとして、特に腐植質を感じさせる温泉は多いと感じています。特徴としては、

1. モール泉或いはモール質を感じさせる色
(濃度により緑から茶色を経て黒色)
2. お湯から漂う独特の土の香り

(泥炭・ピート臭)

3. 成分分析表に検出されるカーボンの気配 (炭酸水素イオン)

の3つの共通点があり、これらの要素は北海道に多く見受けられる温泉の特徴ではないかと考えています。

わかりやすい例として、斜里町を代表する斜里温泉・湯元館を紹介しておきます。湯元館は斜里町で古くから経営を続けておられる老舗の温泉旅館で、温泉マニアのみならず、車中泊の旅人や本州からのライダー達からも高い評価を得ている施設です。成分分析表の情報では泉温55.5℃、成分総計1910mg/kgのナトリウム/炭酸水素塩泉です。総成分のうち約半分に相当する1063mg/kgが炭酸水素イオンで、色も黒みがかったモール泉となっています。浴槽の底は見える程度の透明度があり、優しい土の香りがあります。珍しく成分分析表に腐植質の記載があり、2.2mg/kg程の腐植質が表記されていました。先に書いた3つの特徴を見事に有した温泉で、まさにThe北海道の温泉といった感じです。

香りの部分はなかなか文章では伝わりにくい面ではありますが、硫黄泉やアブラ系の温泉を除けば、大きく分けて「石の匂い」「土の匂い」で二分できるのではないかと私個人は考えています。例えば、伊豆半島や九州など、溶岩石によって磨かれた地域の温泉は石(岩)に磨かれたような匂いがする人が多いですし、土壌の豊かな北海道では石というよりは土の匂いがする 경우가殆どです。香りは人間の記憶と深く連動しますので、温泉に浸



参考資料④：斜里温泉・湯元館。お湯の質も良いが、郷愁を誘う外観も雰囲気があって素晴らしい。

かる時はそういった香りにまで意識を向けてもら
うと、より深く温泉を楽しめるのではないかと思
います。

6. 知床・羅臼エリアの温泉

知床観光といえば本州からだと女満別空港に着
陸して、レンタカーで斜里経由のウトロへと至り、
そこを宿泊拠点として各種世界遺産スポットを巡
る事が基本ルートになりますが、釧路を起点にし
た場合には標津方面から北上し、知床峠を挟んで
南側の羅臼町を拠点にするというルートもありま
す。斜里岳から連なる知床半島は、羅臼岳を中心
に半島そのものが火山脈の温泉ホットスポットで
あり、ウトロ側にも羅臼側にもそれぞれ温泉が湧
いています。

まず知床北側観光の拠点であるウトロ温泉です
が、町管理の混合泉であるため、各種施設でほぼ
一定の泉質の温泉に入ることができます。このうち、
世界遺産の宿・しれとこ村でのデータでは泉温
61.2℃、成分総計8970mg/kgのナトリウム/塩化物・
炭酸水素塩泉(等張泉)となっており、僅かな鉄分
を含んだ黄土色の濁り湯となっています。色的に
も腐植質というより粘土質を感じさせるお湯であ
り、匂いも金気臭があって土っぽいといえ土っ
ぽいのですが、モール泉の匂いとは系統の違う土
臭さです。等張泉である点を考えると、函館市内
の温泉に近い印象です。

ウトロから奥はもう自然保護区になる事から公
共浴場は存在しませんが、知床には岩尾別温泉と
いう、非常に珍しい色の変わる青緑色の湯を湛え
た秘境宿があります。実は私が行った際にはメン
テナンス中で入れなかった為、その色も泉質も未だ
未知のままです。いつか行ってみたい旅館の一つ
ですね。

公共浴場が少ない分、多数の野湯がある事で知
られている知床ですが、カムイワッカ湯の滝など
はシーズン中は観光客やヒグマも行き交うエリア
ですので、野湯っぽい雰囲気を味わうのであれば
羅臼にある熊の湯(羅臼温泉)をお勧めしておきま
す。熊の湯は複数の源泉を混合して給湯してある
半人工の野天風呂であるため、下流の旅館等でも

同じお湯に入る事ができます。洗い場などが必要
な方はその方が良いでしょう。成分総計は1854mg
/kgの含硫黄・ナトリウム/塩化物泉で、源泉の温
度は68.2℃もある為、恐らく熊の湯でも加水して
使用されている筈です。イオン型とガス型の硫化
水素がバランスよく配合されており、日によって
多少は異なるのですが、白濁していながらも
何処か青みがかった色が印象的でした。

羅臼を中心とした知床半島の南側ですが、漁業
関係の人々が沿岸沿いに生活している事から、ウ
トロ側ほど観光向けの遊歩道は見受けられません。
しかし生活道路周辺にはいくつかの特徴的な温泉
が湧いており、地元の人などにも利用されている
ようです。道道87号線を奥へ奥へと進むと、恐ら
く日本最東端と思われる相泊温泉に辿り着く事が
出来ます。海に面した手作りの簡素な入浴施設で
ある為、私が行った時には台風被害で壊れたまま
で入る事はできませんでしたが、その手前には瀬
石温泉という海中温泉が湧出しており、こちらは
海中にある温泉である為、浴槽が漂流物で埋まっ
てさえいなければ潮の状態によっては今でも入る
事が可能かと思われます。相泊温泉にしても瀬石
温泉にしても、元々は沿岸沿いで貝類などを採る
漁師さん達が身体を温める為に利用していたもの
と思われますが、公共浴場ではない為、成分分析
表等の情報はありませんでした。

7. 石北峠越えの要所である温根湯温泉エリア

道東は本当にエリアが広く、石北峠から東側は
恐らく道東という括りで間違いはないと思うので
すが、このエリアには留辺蘂町があり、地味に良
い温泉を多数抱える町となっています。

一時期は結構多くのコマーシャルを流していた
留辺蘂町の温根湯温泉ですが、最近では殆どコマー
シャルを見る機会がなくなってしまいました。こ
のエリアでは遠別つるつる温泉の他、滝の湯温泉
といった透明な温泉が多数湧いており、腐植質の
少ない北海道らしからぬ泉質のお湯を楽しむ事が
出来るようになっています。

私個人が利用した事があるのは滝の湯温泉のみ
なのですが、成分総計259mg/kgの超薄いアルカリ
性単純泉で、微かにイオン型の硫化水素を含んで



参考資料⑤：海中に湧出する瀬石温泉。石組みされた浴槽の縁から中を覗くと、ポコポコとお湯が湧いているのが確認できる。ドラマ「北の国から2002」のロケ地にもなったという。

いました。匂いにも僅かに硫化水素臭があり、pHは9.6と高いアルカリ性を示しています。ここまでpHが高いと皮脂のケン化が起こる事はまず間違いなく、名前からも推測できるように、遠別つつるつる温泉や温根湯温泉も恐らくは近い液性を示していると思われます。滝の湯温泉では源泉温度も44℃と掛け流しに最適な温度で湧出しており、50℃前後の温根湯温泉と若干の温度差はあるものの、いずれにせよ好条件下でのお湯を楽しむ事が出来る筈です。

峠越えの前、峠越えの後、いずれにせよ一休みにはうってつけの場所にあるだけに、旭川から道東に行く際は気に止めてもらいたい温泉地ですね。

8. 最後に

道東はエリアが広い事から2回に分けての紹介となりましたが、到底書ききれない量の温泉情報

があったため、掻い摘んでの紹介となってしまいました。札幌圏から遠いという事もあって、リサーチが及んでないという問題もあり、まだまだ勉強不足だなというのを痛感している次第です。しかしながら、このような文章を書きながらこれまで行った温泉地を振り返ってみると、よくある茶色い湯から黄色い湯、緑色の湯、黒い湯、透明な湯、白い湯、アブラ臭い湯、アンモニア臭い湯など、北海道には実に様々な温泉がある事に改めて驚かされます。

厄介な感染症の流行により人の往来の激減した昨今、北海道の多くの地域は公共浴場を中心とした温泉文化が浸透しており、こういった根の深い文化はそう簡単に消える事はないと考えますが、やはり旅館・ホテルは大きな痛手となっているかと思えます。今は遠出が難しいにしても、この文章が誰かしらの、将来的な温泉に行く動機の一つになれば幸いに思います。



参考資料⑥：留辺薬町の滝の湯温泉の浴槽。透明度は高いが、硫化水素の影響が微かに青みがかっているように見える。